

平成29年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT29107 プログラム名 あそびじゅつ「手が目となったとき—触れることでものを見る」



開催日：平成29年8月22日

実施機関：多摩美術大学

(実施場所) (八王子キャンパス)

実施代表者：海老塚 耕一

(所属・職名) (美術学部・教授)

受講生：小学生 26名、中学生 10名

関連URL：<http://www.k.tamabi.ac.jp/life/asobi/>

【実施内容】

＜受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点＞

本プログラムは、科研費「視覚障害者を含めたすべての人に開かれた作品の構築」(挑戦的萌芽研究)/25580048/平成25年度～平成27年度)の研究成果をもとに実施した。科研費による研究では、美術が晴眼者のみの理解で受容されている現状への反省から、視覚障害者をはじめ、あらゆる人々に開かれた美術のあり方について研究を行った。その過程で、現代人がものに触れるときに、あまりにも視覚に頼りすぎている現状について問題提起を行った。ものを「見る」ことは、単に視覚のみによって完結するものではなく、五感や、時間・空間等のさまざまな感覚を使って、ものに触れていく行為とならなければ、そのものに総体として触れたことにならない。ましてや、そこから芸術にせよ、科学にせよ、ものと人間との交感によって新しいものが生み出されていく源泉とはならない。今回のプログラムで行ったフロッタージュ(板に紙をあて鉛筆やクレヨンでこすり出す)の作業は、目で見ただけでは分からない、ものの繊細な表面のあり方が浮かび上がってくる面白さがあり、「見る—触れる」ことのそれぞれのあり方を考える楽しい場となるために採用した。素材は子どもたちに多くを語りかけ、子どもたちがその言葉を感じ、素材と対話しながら作品を作り上げていく。これらの経験は、子どもたちが今後、世界と関わるにあたっての新たな眼差しを与えるであろう。

受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点は、以下の通りである。

- ①子ども教育に経験のある講師(実施者、実施分担者、実施協力者の古田裕氏)は、現役の美術作家でもあり、自身の制作・研究の歩みに基づく、実感のある言葉・問いを、制作の途中途中で子どもたちに考え、作業するきっかけとなるように工夫した。
- ②美術を学ぶ本学の学生・卒業生がアシスタントとして受講生のサポートを行った。アシスタントには、本プログラムの趣旨や注意点等について事前説明を行い、子どもたちの小さな発見や新たな創造力に、講師や多くの学生・卒業生アシスタントが個々にしっかりと向き合うことを心がけた。子どもが言語化し、他者と共有することによって、さらなる想像力を促し、思考を深めていくように努めた。
- ③現代の子どもは時間をかけて感じ、考える、ゆったりした時間や機会が少ない。講義はもとより、受講者自ら行う作業時間を比較的長く設定し、体験により感受し、それをさらに思考し、また表現することを重視した。

<当日のスケジュール>

平成 29 年 8 月 22 日(火)

- 9:30-10:00 受付(多摩美術大学八王子キャンパス TAU ホール入口)
- 10:00-10:10 開講式(挨拶、オリエンテーション、科研費の説明)
- 10:10-10:30 0. 導入のためのお話(講師:海老塚 耕一)
- 10:30-10:45 1. ここにある「うちわ」、この竹の骨はどんな表面を持っているかな。
- 10:50-11:30 2. 2枚の板が床に敷かれているけれど、そっと目をつぶって、両手でふれてみよう。
- 11:30-12:30 昼食
- 12:30-12:50 3. 床に敷かれた板の上に、紙を置いて、鉛筆で紙に写し取ってみよう(フロッターージュ)。
- 12:50-13:15 4. 板の上に、くぎやドライバーで凸凹を刻み、板に絵を描いてみよう。
- 13:20-14:20 5. 凸凹で描いた、板の上に紙を置いて、再度フロッターージュしよう。
- 14:30-14:45 みんなの凸凹で描いた板やフロッターージュした紙を並べて見てみよう。(鑑賞会)
- 14:45-15:00 修了式(アンケート記入、未来博士号授与、まとめのお話)

<当日の様子>



1.導入のためのお話



2. ここにある「うちわ」、この竹の骨はどんな表面を持っているかな。



3. 床に敷かれた板の上に、紙を置いて、鉛筆で紙に写し取ってみよう(フロッターージュ)



4. 板の上に、くぎやドライバーで凸凹を刻み、板に絵を描いてみよう。



5. 凸凹で描いた、板の上に紙を置いて、再度フロッターージュしよう。



6. みんなの凸凹で描いた板やフロッターージュした紙を並べて見てみよう。



7. 修了式(まとめのお話)

<事務局との協力体制>

- ・振興会との連絡調整、提出書類の確認・修正等の事務は、研究支援部が行った。
- ・委託費の管理と支出報告書の確認は、研究支援部と経理部が協力して行った。
- ・広報活動は、本学生涯学習センター、研究支援部、総合企画室が協力し、本事業についてPRした。
- ・受講者の受付・実施運営に関しては、本学生涯学習センターが行った。

<広報活動>

- ・小中学校や社会教育施設等への周知ネットワークを使い、都内近郊に幅広く告知した。
- ・募集告知を本学 HP に公開した。また、マスコミ等メディアとのネットワークを用い、告知の協力を仰いだ。
- ・毎年多くの来場者がある本学のオープンキャンパス(7月)でも、小中学生に向けて、チラシを配布した。

<安全配慮>

- ・受講生およびサポート学生等に関しては、本学生涯学習センターを通して、学生教育研究災害傷害保険に加入した。(その他の実施者については、大学が加入している保険を適用。)
- ・講座内での怪我等については、講師および学生アシスタント(受講生4名に1名以上配置)が指導し、対応を行った。
- ・夏の暑い時期に実施したため、熱中症対策として水分をこまめに摂取するように呼びかけをする等の配慮を行った。
- ・怪我、体調不調等の緊急時、ならびに地震、火災時の避難対応については、マニュアルがあり、訓練等も行って備えた。

<今後の発展性、課題>

見えるということだけで世界を捉えるのではなく、世界はさまざまなあり方で私たちの前に横たわり、それを捉えるには多様な方法を用いなければならない。ここでは、“触れる”ことをキーワードに、手で、そして皮膚で、さらに目でも“もの”と触れてもらいたいと考えている。さらなる様々な器官で触れる方法、機会を考えていきたい。

【実施分担者】

古谷 博子 美術学部・教授

今井 里沙 美術学部・助手

細道 航 美術学部・副手

【実施協力者】 14名

【事務担当者】

佐々木 絵美 研究支援部 研究支援課・主事

長井 佑馬 研究支援部 研究支援課・書記